・雲は独り　磵(たに)に宿るかと誤(あやま)つ
・鶴は未だ　田に帰らざるかと疑ふ
・行きて看て賞せむことを放(ゆる)されず
・無端くて坐して望みて憐れむ
・客魂　消滅し易し
・境に遇ひて　独り依然たり

通釈

・初冬の夕暮れの今日、外では雪が降り白化粧の様(さま)である。
・山は夕焼けの中に残影を受けて青く浮き立ったように見える。
・谷間に白い雪がたちこめているのと思うと、それは白雪が降ったのを見誤ったのだった。
・白鶴が田に帰らないで山にいるのかと思うと、それは山に降った白雪だったのである。
・山に降った新雪をめでて外に出てみたいのだが、それは今の私には許されないことだ。
・どうすることも出来ずこの客舎にすわったままで遠望して雪をながめやり、一人感慨を催している。
・旅にある身の物思いは、切なく魂も消え消えとなり易い。
・折に触れてこうした境遇に出会うと(忘れていた旅愁を新たにする。)
・身の憂えは、依然として旧のままによみがえることだ。